

教員養成(幼稚園・小学校)における 音楽的基礎能力を培う授業構想

—技術的・音楽的観点から—

The Lesson structure of cultivating musical ability for trainee teacher.
—— Through technical and musical viewpoints ——

竹内真紀
TAKEUCHI Maki

[Abstract] Early childhood is an important period that the mind and body develop greatly. Auditory ability is complete in this time, and it stops growing up after around 13 years old. In early childhood, all sounds mean significantly for children such as mother's voice and nature sounds, and they try to express something more while absorbing various sounds afterwards. One of the expression ways is a singing. Children learn words and emotions through singing. They also learn what is life from singing experience. It can be said that singing is the most primitive expression for children. This primitive expression in early childhood leads to pleasure of expressing in elementary school. In this age, they are not only singing songs, but also playing instruments. And primitive expression advances in musical expression that creates the music reflecting the will. What kind of music they are living together with is very important issue, because auditory ability grows in only limited period. Kindergarten and elementary school teachers should recognize that point and care for it.

Therefore, how teachers play the piano at the class influences a lot for children. What is required to the teachers' piano? High quality expression is necessary, and music which stimulate and encourage to children's sensibility is demanded. However, it is very hard request for students because some of them are beginners at playing piano. Especially they struggle to get special performance technique that is playing the piano and singing same time. When we improve technique, we should have the purpose for that. From my experiences as piano instructor for trainees, I analyze their problems from technical and musical viewpoints. Then I would like to consider a lesson structure that reflects solutions.

1. はじめに

(1) 研究の背景

幼児期は心と体が大きく発達していく重要な時期である。聴覚機能はこの時期にほぼ完全となり(大山、1991)、その発達も学童期の13歳頃までといわれる(酒井、1996)。幼児期には母親の声や自然界の音など、耳にする音は全て大きな意味を持ち、その後もさまざまな“音”を吸収しながら子どもは何かを表現しようと試みる。その表現手段のひとつが歌である。歌とはことばを

増幅強調するところからはじまったものという説があるが(峯、1981)、幼児は歌をとおして言葉を知り、歌の世界を体験することで情緒を育み、生きる事を学んでいく。歌は幼児にとって一番原始的な表現であると言えよう。この幼児期の原始的な表現はその後、小学校において表現する楽しみにつながり、歌を歌うだけでなく楽器を演奏し、意志を反映しながら音楽を創作する高度な表現へと展開されていく。耳が発達する限られた時期である幼児期と学童期に、どのような歌を届けて音楽体験をさせるのかはとても重要な問題であり、教員は責任と自覚をもつべきであろう。

また、教員が子どもに向けて奏でるピアノは、彼らの音楽体験に大きく影響を与える。教員のピアノに求められているものは何であるか。南は次のように述べている。「ピアノを自分のペースで淡々と演奏するのではなく、子どもたちの活動を主体にし、それを支えられる表情豊かな演奏が求められる。子どもたちが音楽に反応する、つまり音を心で感じて体で表現するためには、ピアノ演奏自体により深く大きな表現力を持たせなければならない。」(南、2012)。子どもの感性を刺激し、表現力につながるような音楽が必要で、教員自身とそのピアノにより高い表現力が求められているのである。しかし、ピアノ初心者が多い養成校の授業では、弾き歌いの複雑な演奏技術の獲得に重点を置きがちであり、ピアノの深い表現法まで至らないのが現状である。演奏技術は音楽表現の手段のひとつであるが、技術向上の先には、その音楽の理想像があるべきではないだろうか。演奏技術と音楽表現の相互性を分析しながら、解決策を反映させた授業の構想を立てたい。

(2) 先行研究の検討

教員養成校における音楽指導についての先行研究は

1. ピアノ演奏技術に関するもの
2. 弾き歌いの技術に関するもの
3. 表現活動を念頭に置いた指導法に関するもの

などがある。1や2の論文では、ピアノ技術、弾き歌い技術向上のための考察が、レッスンの視点から行われている。3に関しては保育所保育指針や幼稚園教育要領の領域「表現」を軸とし、子どもの表現や創造性を促す為の理想的な音楽授業の在り方を問うている。その切り口はピアノの表現法(新海、2012)であったり、創作的活動のアイデア(竹村、2006)であったり、子どもの表現につなげるためのピアノの活用法であったり(金井、2018)と、視点はさまざまであった。麓は、創造性豊かな保育者を育成するため「実技」「楽典」「音楽表現」を関連付けた授業モデルの作成を試みている(麓、2015)。ここにはレッスンや授業から起こる具体的な問題の事例は記されていない。本稿では筆者が担当した実技レッスンから聴こえてくる音楽上の問題を捉え、解決法を反映させた授業の構想を立てたい。

(3) 分析の方法と目的

筆者が担当している音楽の授業では、弾き歌いを中心としたピアノの『実技レッスン』と、音楽理論、合唱やリコーダーを学ぶ『授業』で構成されている。筆者は過去に2年間の実技レッスンを担当し、現在は授業を担当している。

分析の方法として、まず、弾き歌いに必要な行為を「見る」「演奏する」「聴く」の3つに分解し、この視点から実際の実技レッスンで起こっている問題を技術的、音楽的、両観点から捉え、分析する。次に、その結果から授業における課題を導き、最後に具体的な訓練法を考察する。教員の音楽の理想を「創造性ある表現力豊かな音楽」と設定し、その理想を育むための授業構想を立てる事を目的とする。

2. 分析と考察

ピアノ弾き歌いのメカニズムについて平井はこう述べている。「弾き歌い」とは「楽譜を読む」・「鍵盤を弾く」・「音を聴く」・「歌詞を読む」・「歌を歌う」という5つの事項を同時進行させるという高度な技術が不可欠であり、さらに授業では「学習者の観察」「学習者の支援」といった児童や生徒を指導する能力が必要となる（平井、2016）。このように、いくつもの作業を同時に行う弾き歌いの技術は極めて特殊である。楽譜が読め、ピアノが弾け、歌が歌える者にとっても、それと同時にやるのは、全く別の行為である。平井のメカニズムを更に分析すると、楽譜や歌詞をA「見る」、弾いたり歌ったりB「演奏する」、そしてC「聴く」という行為が大きな柱であると言える。まずは、レッスンにおいて起こっている問題をこの3つの観点で捉え、解決法を分析したい。

(1) 分析

3つの観点で捉えた分析結果を筆者がまとめたものが【表1】である。

A 見る

① 譜読み

音楽を理解するという事はしくみを理解するという事である（マンテル、2011）。弾き歌いのように複雑な作業こそ、このことは必要であろう。学生の最初のつまずきは、多くの情報の処理法であることが多い。楽譜にある歌の旋律、歌詞、ピアノの右手、左手、それぞれを同時に処理する前に、どこが同じでどこが違うのか、どう関わり合っているのか等、全体の構成と詳細の把握をすることは、複雑な譜読みの効率化につながり、練習時間の短縮になる。更に、構造が頭でわかっていると、演奏のプラン立てが容易となる。しくみや関連性から、どう演奏するかが見えてくるからである。

また、流れがぎこちない演奏も多々耳にするが、ひらがなやカタカナで書かれた文字を音符に当てて読む、つまり楽譜を点で捉えて縦に読んでしまう事が原因と考えられる。音符や文字などの発音起点だけに目を向けるのではなく、常に流れている音楽を意識した譜読みを心がけたい。ピアノや声、言葉、すべての要素が音として調和しているか、音楽として説得力があるか、を耳で確認することも忘れてはならない。

② 視界

演奏する際、楽譜を見ながら弾けない学生が多い。その問題を抱える学生たちは鍵盤を見ないで弾く事が出来ないため、まずはピアノパートを完全に暗譜をすることからスタートする。楽譜を暗記し、視界が完全に鍵盤を支配するようになってからやっと歌の譜読みに入る。音が揃うまでに膨大な時間がかかるため、レパートリーを増やす事が困難となる。更に、覚えてしまっ

ら演奏する音楽は、自分の中で出来上がった強固な世界観の再現に近く、閉鎖的な音楽になりがちである。ピアノの譜読みの時点で、歌詞や歌の旋律にも視線を広げる事が大事である。

また、実際の現場では自分の演奏だけでなく、子どもたちの様子など、外の環境にも気を配らねばならない。鍵盤を凝視しなくてもよいように、ある程度の音程感覚を指につけることも大事である。創造性ある表現力豊かな音楽体験はひとりで完結するものではなく、子どもと共に歩いていくものである。音楽が閉鎖的にならないよう気を付けるべきである。

③ 先を見る

音楽は、時間の流れと共にあるものである。しかし楽譜を読み、実際に音にするという演奏者の作業は瞬時には出来ないもので、この作業に時間がかかってしまうと音楽の流れが停滞する。大山や浦田はこの問題について次のような提案をしている。「ピアノを弾く経験を多く積んでいる者は、目で読んだ音符を指先から音に変える作業がほぼ反射的にできる。これに対して、ピアノを弾く経験が浅い者は、音符を読んで音に変える作業に時間がかかる。」(大山, 1991)。「初心者はず、9割は奏出されている音に意識を向け、1割は楽譜を先に読んでいくことに意識を向ける。」(浦田, 2007)。音楽の流れを失わず演奏していくためには、常に現在演奏している場所より先を見て準備しなければ間に合わない。つまり、指が反応している現在を処理すると同時に、頭の中では未来に鳴らす音の想定が必要となってくる。自然な音楽を奏するためには、次元の違う2つの行為が同時に行われていなければならないということである。

B 演奏する

① ピアノ

学生の多くはレッスンにおいて、自分のために弾いている。その音楽は、広い教室でたくさんの子どもを相手にした弾き歌いという状況を想像していない。自分が演奏している音楽が彼らに聴こえるのか、音量、音質が現場に相応しいものであるかを客観的に聴き、それが歌の世界観に合ったものかどうかとも考慮するべきである。現場の環境をレッスンの段階から想定することが重要である。

歌に寄り添うピアノを弾く上で大きな問題となるのがレガートで、多くの学生が抱える問題である。レガートがうまくゆかない理由は大きく2つある。1つ目は「無駄な動きの多さ」で、これを極力減らすためには鍵盤の傍での打鍵を心がけることである。2つ目は「運指」である。流れる旋律を5本の指で表現するためには、効果的な運指を熟考することが必須である。流れが止まりやすい箇所を練習の段階からよく聴き、その場所をつなげられる指づかいを前後の旋律の動きから探し当てるべきである。例えば音の跳躍がある場合は、跳躍の先を一番に考慮して跳躍元の指を決定し、そこにつなげる指の運びを考える。また、長いフレーズの場合は、1の指をくぐらせる場所や方法もレガートに大きく影響する。手の形と旋律との関係を探る事が必要であろう。このような解決法は常に注意深く聴く事を前提としている。

ペダルの問題もまた多くの学生が抱えるものである。何故ペダルを用いるのかを問うと理由が曖昧である場合が多い。どのように踏むかは足ではなく耳が判断するという事を忘れてはいけない。和声やコードネームの理解はもちろんであるが、どのような響きが欲しいのかを考え、ペ

ダルのタイミングや速度で響きがどう変わってくるのか、身体(指・足)の感覚と響きの相互性を掴むことが必要である。

感覚が薄れやすい「休符」と「長い音」の扱いにも触れたい。まずは休符であるが、休符を音楽と見なさない学生が多い。休符は音楽が止まるのではなく、音がなくなることで生まれる緊張感や、次のフレーズへ向かう前の期待など、多くの解釈や意味がある。休符をきちんと聴く事で自然な呼吸が生まれ、リズムの面白さも倍増し、音楽に生命力が生まれる。またピアノは響きが減衰していく楽器で、長い音を持続させ聴き続ける事が難しい。しかし減衰していく中にも音の生命はある。打鍵の瞬間から音に対する意識が離れてしまう学生が多いのであるが、減っていく響きの中でも音を捉え、響いている音を歌い続ける力が必要である。創造性ある表現力豊かな音楽体験を届けられるよう、演奏の目的意識を持ち、子どもが歌いたくなるような環境を音楽でつくるのが大切である。

② 歌

多くの学生は、弾き歌いというたくさんの行為の同時処理に必死になるあまり、歌唱までの注意力を持ち合わせていない。自分の声を客観的に聴き、子どもに伝わる発声を目指したいところであるが、河合が指摘するようにピアノの音を聴く以上に自分の声を聴くことは難しい。「歌唱の技術の場合、ピアノ技術のように客観的に計画的に順序付けて技術を習得できるものではない。なぜならば、自分の発声そのものを客観的に聴くことができないからである。歌唱は自らの声帯と共鳴機関を使っており、発せられた声の多くは、外耳でとらえた音より、むしろ内耳から骨伝導で伝わってくる音を自分の声ととらえる。誰でも自分の声の録音を初めて聴いた時、これは本当に自分の声であるのか信じられない感情を持つ。また、他者は自分の声をこのように聞いているということを初めて知る。」(河合、2017)。自分が聴こえている声と、他人に聴こえている声は違うという自覚を持ち、しっかりと遠くまで、一人ひとりに声を届ける意識が必要である。

また、「歌曲は『音の中にとけこんでしまった言葉の芸術』である」と『音楽と詩の限界』のなかでA.W.アンブローズはいっている(A.W.アンブローズ、1952)。子どもは、言葉が溶け込んだ音楽の中で様々な体験をする。歌詞から状況が浮かび歌の世界を疑似体験することで、情緒が育っていく。言葉から感じる感覚や感情を、音楽が子どもの心に結びつけるのである。また、マンテルによれば、すぐれた朗読家は言葉のアーティキュレーションをコミュニケーションの手段としてとらえているようである(マンテル、2011)。何を思いどう発音されるかで、語られる内容の意味合いも変わってくるであろう。弾き歌いはこの朗読行為に音楽が加わる訳だが、楽器を演奏していても言葉に対して意識が散漫になることなく、言葉をどう伝えるのかという事を大切にしたい音楽づくりを目指したい。

③ 伴奏

歌の伴奏の構造には大きく分けて2種類ある。ひとつは右手が歌の旋律を弾く場合、もうひとつは旋律を弾かず両手で伴奏する場合である。前者の場合は左手のみが伴奏を司ることから単調になりやすく、伴奏のバリエーションに気を付けたい。また、コードネームを理解すれば伴奏付けは可能であるが、その伴奏パターンはどれほどあることだろうか。楽譜に書かれているもの

けが答えなのではなく、様々なパターンを身に着けておく事が必要と考える。古谷もこのように説いている。「忠実な譜読みと正確な演奏は出発点であり、実際に子どもたちを前に伴奏をする場合には、その場の雰囲気や子ども達の反応に合わせ、楽譜どおりではなく、臨機応変に伴奏形を変えたり即興で音を加えたり減らしたりできる能力が必要である」(古谷、2007)。子どもたちは日々、様々な気持ちで歌を歌う。それだけ彼らからの反応も様々である。教員も豊かな気持ちでそれらを受け止め、状況に応じたアレンジで対応することを心がけたい。同じ曲でたくさんの伴奏のパターンを創り出す技術も必要と考える。

また、前奏、間奏、後奏の演出も考えるべきである。これらは子どもとのやりとりの中で教員がピアノで訴え、また応えるべき部分である。前奏は歌の世界に誘導するための音楽、その後は歌を引き立たせる伴奏に続き、さらなる発展を期待させる間奏を経て、歌の世界の余韻を残しつつ閉める後奏、とそれぞれの役割を全うすることで、より豊かに歌の世界をピアノで表現することが可能となり、子どもと教員が音楽で意志や感情を分かち合える音楽体験につながる。子どもの表現を助長し、促す伴奏が必要である。

C 聴く

① 自分の音を聴く

聴く事はこれまで述べてきた問題全てに必要な不可欠である。演奏しているときに耳を使っていない瞬間はなく、音色、音量、ペダル、歌、バランス、など、私たちは自分の出す音を常に判断しながら演奏している。聴く行為には2つある。一つ目は弾きながらにして客観的な聴き方をすることである。

② 演奏前に聴く

もう一つの聴き方は、演奏前にこれから奏でる音楽を捉え、聴く事である。演奏する音楽のプランを十分に持たないまま弾き出し、うまくいかず簡単に弾きなおす学生がとても多い。どういう音楽を奏でたいのか、イメージがない事、そのイメージを実現させるための準備が出来ていない事が原因である。「弾く前に聴くことが必要である。これをしないと、自分の音楽的構想を、いくらかでも予測をもって、あるいは信念を持って、はっきりと表現することができなくなる。～中略～ 1曲の最初の音を弾く事は、実は心の耳にすでに捉えられていたイメージを鍵盤上に移すことなのである」(バーンスタイン、1999)、というバーンスタインの指摘や、「ピアノを弾く、という行為の目にみえるところは、単に指の運動ですが、内部の動きをみれば、心に欲する音があり、頭が指先に命じてそれを実現するという過程を経ていなくてはならない」(山岸、1986)、という山岸の訴えがある。教育の現場で子どもに音楽の感動を呼び起こす事や、共に歌をうたう過程で豊かな情緒を育てる事は教員の務めであろう。その務めに対して自分の出す音に責任を持ち、十分なイメージとプランを持って、演奏前に「聴く」訓練が必要である。不用意に出してしまった音は取り消すことが出来ないのである。自分の理想とする音楽を明確に持つことが大切である。

【表1】実技レッスンで起こっている問題の分析

技術	問題事項	技術的な問題	解決法	
		音楽的な問題		
見る	①譜読み	楽譜の読み方、捉え方	全体の構成と詳細の把握	
		音楽の流れのぎこちなさ	全ての要素を音として調和させる	
	②視界	鍵盤を凝視 譜読みに時間がかかる	ピアノの譜読みの時点で歌の方にも視線を広げる ある程度の音程感覚を指につける	
		音楽が閉鎖的	表現が子どもに向かっている音楽 幼児・児童と共につくる音楽	
	③先を見る	体の反応の遅さ	現在演奏している場所より先を見て準備	
		音楽が停滞	頭の中で未来に鳴らす音を想定	
演奏する	①ピアノ	音量、音質の考慮 レガートの問題 ペダルの問題 休符と長い音の処理	現場の環境を 想定する	自分の音を客観的に聴く 打鍵の改善、運指、手の形と旋律の関係 身体を使い方と響きの相互性を掴む 休符を音楽と捉える 打鍵後の響きへの意識の向け方
		演奏の目的意識		子どもが歌いたくなるような環境をピアノでつくる
	②歌	自分の声を客観的に聴けない		自分に聴こえている声と、他人に聴こえている声は違うという意識
		言葉に対して意識が散漫		言葉や物語を音楽で表現する意識
	③伴奏	伴奏のパターンを固定化しない 前奏・間奏・後奏の扱い	同じ曲でたくさんの伴奏のパターンを創り出す練習 導入、本編、終止という、歌における物語性	
		単調で変化がない	子どもの表現を助長し、促す伴奏	
聴く	①自分の音を聴く	音量、音質、バランスなどの判断 音楽としての調和	音を客観的に聴く	
		すぐに弾き直す	自分の理想とする音楽を持つ	
	自分の音に対する責任			

(2) 考察

これまでA「見る」 B「演奏する」 C「聴く」の観点から、実技レッスンで起こっている問題を挙げ、解決法を分析してきた。ここから授業における課題を導き、その後具体的な訓練法を考察する。

A 「見る」とは、情報を取得し、演奏につなげるための楽譜の読み方をするることである。必要な課題を次のように考える。

- ①音や記号などの知覚
- ②作品の全体像把握のための楽譜の読み込み
- ③音楽の流れと視覚的な流れの相互性

B 「演奏する」とは、知覚したものを音にすること、また理想とする音を実現する過程でもある。必要な課題を次のように考える。

- ④目で見た情報と体の使い方との関係性
- ⑤常に耳で判断する事
- ⑥作品の解釈を深める為の楽譜の読み込み
- ⑦音楽を豊かにするために生み出す事

C 「聴く」とは、すべての瞬間において行われていることであり、音楽において判断となる行為である。必要な課題を次のように考える。

- ⑧常に自分の音を聴く意識
- ⑨理想となる音楽を持つ事

ここからはそれぞれの課題を授業でどう克服してゆくか、考察する。具体的な訓練法を筆者がまとめたものが【表2】である。

「①音や記号などの知覚」において、必要なのは俊敏性である。音が記されているカードなどを見て、その音名を反射的に音読する訓練を取り入れたい。単音から始め、旋律の断片や和音に至るまでいくつかの段階を設け、最終的には目に入ったものを反射的に認知出来るようになることを目指す。実際の演奏のしくみは、情報の知覚から体の反応までを含めたものだが、カードで知覚したものを瞬時に声に出す事によって、身体の反応を円滑にする狙いがある。またこの時、書かれた音の連なり方や前後の流れ方にも着目し、音程の幅やメロディーのラインを景色のように、絵として視覚的に掴む感覚も強化したい。その感覚は、ピアノに向かったとき、現在演奏している音よりも先の楽譜の景色を素早く捉える力にもなり、続く③④の解決にもつながる。

「②作品の全体像の把握のための楽譜の読み込み」と「③音楽の流れと視覚的な流れの相互性」においては思考力が問われる。多くの楽譜に慣れることの必要性を感じる。リズム課題、視唱課題など授業の度に新しい楽譜に触れたい。その際、どんなに短い課題であったとしても予見時間を大事に捉え、どのように楽譜を読むかを実演の前の段階から考える習慣をつけたい。実演の際は、音符を点で読むのではなく流動的な視線で広く読むことを心がけ、鳴っている音よりも先の箇所を眺める訓練を意識的に行う。またリズム打ちの際は特に、打った瞬間の起点で音楽の流れの意識が希薄になりやすいため、長い音価などは厚みのある和音で支えるなど、音楽の流れを感じやすくするよう、ピアノ伴奏にも気を配りたい。

「④目で見た情報と体の使い方の関係性」においては、①②③において培われたラインを掴む訓練を、弾き歌い楽譜にも応用していく。流動的な楽譜の読み方はそのままに、右手、左手のピアノの音、歌の旋律、歌詞、強弱記号、ペダル指示の位置、などと徐々に視線の縦幅を広げていくことを目指したい。ここでは、扱う楽譜の情報が多くなる上にピアノを弾く行為が増える為、2つの事に留意したい。まずは視点のポイントをつくることである。ピアノを演奏しながら楽譜の情報全てを隈なく読む事は困難であるから、多くの情報のうちのどこを重点的に見るべきかを絞る。例えば跳躍があり演奏するのが困難な部分や、これまでとは音型が変わる分岐点、意味合いの強い歌詞がある場所など、音を出す準備に特に時間が必要な箇所を予見極め、自覚する。もうひとつは、オクターヴや5度、4度、3度の音程感覚を指に付けることである。楽譜から得た情報を、視線を移すことなしに鍵盤へ直結することが出来れば、視界は自由になり、余裕も生まれる。視覚と身体感覚の記憶を心がけたい。

「⑤常に耳で判断する事」と「⑥作品の解釈を深める為の楽譜を読み込み」の対策としては、アンサンブルを積極的に取り入れ、意識的に聴く機会を増やしたい。歌の際はカノンや2声の練習などを取り入れ、自分の声と、他の人の声を共に聴く訓練を行う。合唱やリコーダーに関しても、パートの絡みのある構成のものを選ぶ。

また、クラスをグループ分けし、発表し、聴き合うことを取り入れたい。発表する事で演奏の目的をつくり、表現を外に向ける狙いがある。そしてその際、どのように音楽を創っていくか、話し合いながらプランを練ることも試みたい。この訓練は楽譜の読解力を培う事にもつながる。創造性ある音楽とは、自分で創り上げてゆく音楽である。なんとなく音を合わせるのではなく、音楽をより良くしていこうとする自分の意志を育むことを期待する。更に、演奏した側も聴いた側も、その音楽に対しての印象や感想などを言語化する事を試みたい。音楽という曖昧なものを言語化するのは簡単なことではないが、言葉でまとめることで聴き方が明確になり、自分の音に対しても客観的に捉えることが出来るようになる。将来的に教員となって授業を持った時、子どもに伝える手段として言語でまとめることは必ず必要となってくる能力であり、そのためにも効果があると考えられる。

「⑦音楽を豊かにするために生み出す事」の対策としては、即興とアレンジが重要となる。筆者が担当する楽典のクラスにおいて、リズムや視唱、合唱、リコーダーなどを行う際、支えになるのは筆者のピアノであるが、この伴奏でたくさんの可能性を示す。伴奏の形を変えたり、コードそのものを変えたり、即興で楽しんだり、同じ曲において工夫次第で様々な音楽の可能性が有る事を履修者に示し、彼らの音楽体験を豊かにするのが狙いである。また、筆者は実技レッスンにおいて、同じ曲で数種類の伴奏アレンジを創作することを課していたが、実際に課題をアレンジに絞ったレッスンも必要と思われる。

「⑧常に自分の音を聴く意識を持つ」と「⑨演奏前に理想となる音楽を持つ事」についてであるが、これまで述べた音楽活動の全てに、聴く事は関わっている。楽譜から情報を取得し、知覚したものを体の反応を通して音にしていく過程に、たくさんの同時進行の行為があるが、それらは個別に行われているわけではなく、連動している。それらすべてをつなげているのは聴く行為であり、同時に判断が行われている。判断のためには理想が必要で、子どもに向けてどのような音楽体験をさせたいかという教員の理想の音楽像が明確にあるべきである。その音楽を想像し、自分の内側から求めようとする内的聴覚は大きく演奏を左右する。演奏前に、これから奏でる音楽の実現に向けて精神集中することを、授業の段階から習慣づけたい。

【表2】授業における具体的な訓練法の考察

技術	行為	課題	必要なもの・能力	具体的な訓練
見る	情報の修得	①音や記号などの知覚	俊敏性	音、和音を見て瞬時に音名を音読 視覚的な音程感覚を意識
	演奏につなげる 楽譜の読み方	②作品の全体像把握の ための楽譜の読み込み	思考力	授業の度に必ず新しい楽譜に触れる 実演の前の予見の段階からの読譜の授業
		③音楽の流れと 視覚的な流れの相互性	流動的な楽譜の読み 方	音符を点で読まず、音の連なりや絵として捉える 発音点以降の生命力を感じやすい伴奏の工夫
演奏する	知覚したものを 音にする	④目で見た情報と 体の使い方の関係性	先回りした楽譜の 読み方と体の準備 視覚と身体感覚の 記憶	楽譜において視点のポイントをつくる 指に音程感覚をつける
	理想とする音を 実現	⑤常に耳で判断する事	聴く機会	アンサンブル、自分の音と人の音を聴く訓練
		⑥作品の解釈を深める 為の楽譜の読み込み	発表する機会 読解力	音楽づくりのプランを練る 音楽を良くしていこうとする自分の意志を育む 音楽を言語化する訓練
	⑦音楽を豊かにする ために生み出す事	即興とアレンジ	理論だけでなく実際に多彩な音楽を体感 アレンジの課題	
聴く	判断	⑧常に自分の音を 聴く意識	判断力	理想の音楽像や教育の意志をもって音楽を判断
		⑨理想となる音楽を 持つ事	想像力 内的聴覚	

3. まとめ

教員の音楽の理想像を「創造性ある表現力豊かな音楽」と設定し、実技レッスンの場で起こっている問題から分析・考察を繰り返して広げた。解決法を探るほど問題の根深さを知り、課題は増えるばかりであった。

大学のレッスンや授業で行われる音楽の時間は、履修者にとってほんのわずかな時間である。レッスンの為の準備や、音楽と向き合うひとりの時間こそが履修者にとって大きな割合を占める部分であり、この部分を充実させることを目的とした授業を行わなくてはならない。

また、豊かな音楽を奏でる教員に導くために、筆者自身も授業において履修者の感性に響く音楽を届ける努力が必要であると痛感した。履修者が得た音楽体験の積み重ねが、そのまま彼らの表現力につながるからである。

更に、教員養成の音楽的基礎能力を培う為には、楽器を目の前にした対処だけにとどまらず、子どもの状況や心理を理解する優しさや、子どもを育む意識から音楽を見直すことも忘れてはいけない。

まだまだ課題は山積みであるが、今回立てた授業の構想を実際に行い、次の研究につなげていきたい。

【引用・参考文献】

〈著書〉

- A.W. アンブローズ (1952) 『音楽と詩の限界』音楽之友社
 大山美和子 (1991) 『幼児の音楽教育』国土社
 酒井徹 (1996) 『こちら心の音楽教室』マイクロコスモスミュージックスクール
 セイモア・バーンスタイン『心で弾くピアノ』音楽之友社
 ゲオハルト・マンテル (2011) 『楽譜を読むチカラ』音楽之友社

峯陽(1981)『保育のための音楽入門』青木書店
山岸麗子(1986)『あたまで弾くピアノ』音楽之友社

〈論文〉

- 浦田真理子(2007)「ピアノ指導に関する一考察—音と心の関係に視点をあてて—」『松本短期大学紀要』、松本短期大学、pp. 125-136
- 金井玲子(2018)「保育者養成課程におけるピアノ指導：こどもの表現活動を活性化させるピアノの活用とその指導法」『浦和論叢』、浦和大学・浦和大学短期大学部、pp.121-135
- 河合玲子(2017)「幼児教育・保育における〈こどものうた〉の歌唱技術の修得に効果的な指導法の一考察」『名古屋女子大学紀要』、名古屋女子大学(63)、pp. 299-311
- 新海節(2012)「保育者養成校におけるピアノ教育」『藤女子大学紀要』(49)、第Ⅱ部、藤女子大学pp. 147-153
- 竹村 壽美子(2006)「保育における表現の問題：「表現活動：音楽」の実践を通して」『四天王寺国際仏教大学紀要』(44)、四天王寺国際仏教大学、pp. 275-293
- 南夏世(2012)「リズム表現活動におけるピアノ演奏法習得の試み『初等音楽』実践課程の記録」『神戸海星女子学院大学研究紀要』(51)、pp. 81-88
- 平井李枝(2016)「教員養成課程学生に対するピアノ『弾き歌い』指導法の研究」『宇都宮大学教育学部教育実践紀要』(2)、pp. 91-98
- 麓洋介(2015)「保育者養成校における音楽教育についての一考察 —「実技」「楽典」「表現」の関連付けによる総合的・段階的な指導のための授業モデル—」『愛知教育大学研究報告. 教育科学編』(64)、pp. 21-26
- 古谷和子「幼稚園教諭・保育士 養成課程におけるピアノ指導の一考察-- リズム指導」『関東短期大学紀要』(51)、関東短期大学、pp.169-201